

(体育)

体育授業における ICT を活用した「学び方」をデザインする ～主体的に運動に取り組む子どもたちの育成を目指して～

大阪市立鷹合小学校 研修部

1. 研究主題設定の理由

本校は昨年度から「ICT の活用が体育の授業改善につながる」という考えのもと、「できる喜びを実感する体育授業を創造する～ICT 機器を活用し、対話を通して～」の研究主題を掲げて授業研究に取り組んできた。ICT の活用を通して「児童－児童」「指導者－児童」間に対話が生まれ、それらによって運動技能が向上し、運動に対する愛好的態度を高めるという目標をもって授業実践を模索してきた。

しかしながら、体育授業の中で ICT の活用は、指導者や児童が ICT の操作や準備に多くの時間を費やすという課題が見られた。したがって、ICT を授業の中に溶け込ませ、「いつでも、どこでも、だれにでも」簡単に操作することができ、児童が当然のようにそれらを活用した学習の仕方(学び方)を身に付けることが課題として挙げられた。

2. 研究の趣旨

学習者(児童)に視点をあて、ICT を活用した児童の「学び方」に着目し、主体的に運動に取り組む児童を育成するために研究を進めてきた。体育科の学習においては、単元を通して、児童自身が運動に対する見方・考え方を働かせ、自ら課題を発見し、他者と協力しながら自らの課題を解決していく学習過程が重要となる。昨年度の ICT を活用した「他者との対話」や「自己との対話」をもとに、運動についてどのように感じ、考え、行うかを児童自身が気付き理解していくことが求められる。体育科における ICT は、児童の対話を通して運動技能を高める活動や児童の運動に対する動機付け、指導者による観察・分析・指導を支えるツールとして活用できることが多く、その成果も昨年度の実践から多くみられた。

以上のことから、本研究は、ICT を活用した児童の「学び方」の変容が、自ら課題を発見して自らその課題を解決していくという運動に対する主体性を育むという仮説のもと研究を行ってきた。児童の運動に対する主体性を高めるために、ICT の活用がどのように寄与できるかということについて検討し、こうした ICT を活用が、体育授業の改善につながるということを前提に、研究にあたってきた。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① ICT を活用した児童の主体的な「学び方」を研究する。

- 一人一台端末を活用した、動きの確認・共有を図る。
- 一人一台端末を活用した、課題の発見・課題解決を図る。
- GIGA スクール構想の成功の実現に向けた、一人一台端末の活用を模索する。

視点② 運動指導・支援の工夫を図る。

- 指導者と児童とのよりよい相互作用を模索する。

- 運動支援ツールの開発を進める。
- 運動教材・教具、場の設定の工夫を図る。

視点③ 単元を通した対話的な取り組みを位置づける。

- 課題形成場面における対話の充実を図る。
- 観察学習場面における対話の充実を図る。
- 運動学習場面における対話の充実を図る。

視点④ 学校全体の体育的活動を計画する。

- 「体育集会」や「運動週間」等の体育的行事を実施する。
- PTAと連携し体育的行事の促進を図る。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 児童の実態や教材に合わせて多様なアプリケーションやツール、機能を活用した「学び方」を進めていくことで、児童は自ら課題を見付け、自ら課題を解決することができた。
- 体育の授業アンケートの項目（「低学年：自分のめあてをもって学習していますか」「高学年：どうやって運動しようか考えながら学習していますか」）でいずれの学年も向上しており、本研究における ICT の活用は児童の「学び方」を支えることができたと示唆された。
- 教材や教具、場の設定を工夫することで、運動が苦手な児童も意欲的に運動学習に取り組むことができた。また、自己の課題や興味に即した教材や教具、場を選択することで、運動についての理解や自己の動きについての理解をより深めることができた。
- 対話的な取り組みを、単元を通して行うことで、運動について指導者に教わるだけでなく、他者や自己との対話を通して課題の解決に向かうことができるようになってきた。また、学び合うことのよさを実感することができた。
- ICT を活用した「学び方」のデザインとは、従来の一斉指導による授業だけでなく、よりよい学習環境のもと児童それぞれの志向性や学びの道筋に合わせた授業が求められることであった。児童が自らの学びに意志をもち、対話し、自己調整をしながら学んでいく学習過程に ICT が必要不可欠であり、指導者はその「学び方」を支え導いていく役割を担うものとして考えられた。

(2) 今後の課題

- 自ら ICT の活用方法を決定することや学習活動の場の選択など、児童それぞれが学びに対して意思決定することで、学習が停滞する児童の様子も見られた。適切な支援や指導を検討する必要がある。
- 学びが児童に委ねられることで、学習の場や運動の行い方の面での安全性の保障が難しかった。授業規律や学習規律を改めて検討する必要がある。
- オープンスキル教材では、相手の動きに応じて自らの動きも変えていかなければならない運動特性がある中で、児童自らがその課題に着目し、解決していくことができるような指導者の指導・支援を工夫していく必要がある。